



# 新しい時代にむけた教育改革を図書館は推進できるか

—お茶の水女子大学「図書館入試」のチャレンジ—

## 森 いづみ

### 1. はじめに

2016年3月、高大接続システム改革会議の『最終報告』<sup>1)</sup>が公表された。これは、2015年12月の中央教育審議会答申<sup>2)</sup>に基づき、高大接続改革（高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的な改革）の実現に向けて具体的方策がまとめられたものである。『最終報告』では、大きな社会変動の時代を生き抜くために身に付けるべき力として、(1)十分な知識・技能、(2)それらを基盤にして答えが一つに定まらない問題に自ら解を見いだしていく思考力・判断力・表現力等の能力、(3)これらの基になる主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度が、「学力の3要素」と位置付けられている。

図書館は古くから(1)を保障する社会的機能をもち、近年は「情報リテラシー教育」の文脈で、(2)や(3)についても学校教育や社会教育において重要な役割を果たすことが求められてきた。

### 2. お茶の水女子大学の「図書館入試」

「図書館入試」とは、お茶の水女子大学（以下、本学）が2016年度入試（2017年度入学）から実施する、新しいAO入試「新フンボルト入試」の一部分で、全体像は一次選考を兼ねる文理共通のプレゼミナールと、二次選考（文系「図書館入試」、理系「実験室入試」）の二段構えである。中教審で審議されていた入試改革を先取りしたもので、文部科学省の平成26年度大学教育再生加速プログラムのうち、「入試改革」のカテゴリーで採択された。

受験者はプレゼミナールで大学の授業を体験し、その際のミニレポートなどが一次選考の対象になる。二次選考は、文系は本学附属図書館を舞台に、自在に文献や資料を駆使しつつ自分の論をじっくり練り上げ、グループ討論や面接を行う。その成果やプロセスを通じて論理力や課題探求力、独創性などが問われ、いわゆるペーパーテストで測れない潜在的な力（ポテンシャル）を丁寧に見極めようというものであり、知識量の多寡ではなく、その知識をいかに「応用」できるかが問われる<sup>3)</sup>。

### 3. 「図書館入試」体験版「図書館情報検索演習」

#### 3-1. コンセプトを実現するための方針

2015年8月に、「新フンボルト入試」の体験版プレゼミナールが実施された。大学側にとっても、受験生や高校側にとっても初めてのことなので、本番の前に課題を洗い出そうという試みだった。「図書館入試」の模擬体験「図書館情報検索演習」は、「課題の提示」、「情報探索レクチャー」、「レポート作成（情報探索・執筆）」、「グループディスカッション」という四つのプロセスで実施した。

もっとも難しい課題の一つは、「自在に文献や資料を駆使」できる環境をどう提供するかであった。大学図書館が提供する文献や資料は、いわゆる「蔵書」だけではない。ネットワークを介してアクセスする学術情報（有料で契約するデータベースや電子ジャーナル、無料で見られるオープンアクセス論文や報告書など）が使えなくては、「自在に文献や資料を駆使」しているとは言えない。一方で、ネットワークが使えるということは、電子メールやネット上の質問掲示板などが使えることにつながり、入試の公正性や厳格性に関わる。また、本学の図書館への「慣れ」の問題や、利用したい図書などを既に他の受験生が使用していた場合に公平性が保てるのか、という課題もあった。これらの課題を解決するため、関係部署（入試推進室、AO入試室、入試課、および情報基盤センター）と幾度も打ち合わせを重ね、以下の方針を固めた。

- ①コンテンツは、ネットワーク上の情報環境を含め、本学の学部学生と同じ環境とする。公正性はアクセスログの記録などで担保する。
- ②人的サポート体制を整え、慣れの問題に対する公平性を担保する。
- ③使い終わった資料は速やかに返却、新聞や百科事典などの基礎的なデータベースはなるべく利用制限を解除することで、情報利用における同時性と公平性を確保する。

#### 3-2. 実施場所

本学図書館には2007年度からアクティブ・ラーニングに対応できる設備が整備され、日常的に活用されている。「レポート作成（情報探索・執筆）」はラーニングコモンズ、「グループディスカッション」はキャリアカフェが使用できた。当日視察に入った入試外部評価委員から「図書館にラーニングコモンズがある必然性を初めて感じた」と言われたことが印象に残っている。図書館のコンテンツは、遠からず電子的な形に置き換わるだろうし、その積極的な推進も必要である。しかしながら、現時点では紙の資料が置いてある場所と一体化した（かつネットワーク上のコンテンツにアクセスでき、ディスカッションもできる）学びの場が、まだまだ必要ということなのだろう。

### 3-3. 役割分担

四つのプロセスのうち、図書館員が直接担当したのは、「情報探索レクチャー」と「レポート作成（情報探索・執筆）」のサポートだったが、ここにも重要な課題があった。「最近では、誰でも簡単に情報を探し入手できる。しかし、それがゴールではない」「課題を発見し、解決方法を考え、人に伝える能力は、大学の学習研究はもちろん社会でも役に立つ能力だ」「新フンボルト入試は合否判定だけを目的にしているのではない。大学での学び方を体験し、お土産を持ち帰ってほしいという願いが込められている」。このような入試担当の先生方の情熱に応えるには、「情報探索レクチャー」の中身も重要である。本学の図書館を使いこなすコツを伝授するだけでなく、もっと本質的で汎用的な内容にするべく、国立大学図書館協会が2015年6月に公表した「高等教育のための情報リテラシー基準」も活用して、役割分担や話す内容を検討した。

### 3-4. 実施結果

参加者アンケート（参加者88名、回収数81）のうち、特徴的な項目を紹介する。「情報探索レクチャー」の理解度は、「とても分かりやすかった」「分かりやすかった」が73%、「とても有益だった」「有益だった」が94%だった。また、「レポート作成の支援や助言」は、「有益で助かった」「少し役に立った」が95%だった。多少難しくても有益と感じることがうかがわれる。また、「レポートのための材料として参照したもの」は、「図書館の蔵書+ Webサイト」が最も多かった。

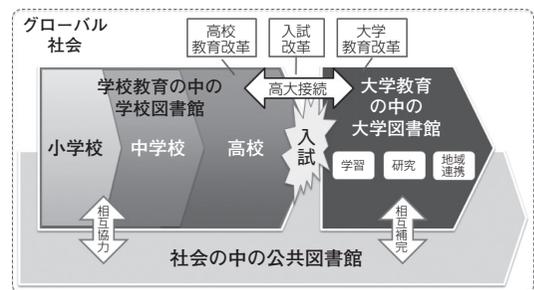
### 4. 新しい時代にむけた教育改革推進のために

「図書館入試」をきっかけに、高校の司書教諭、

司書の方々、学校図書館関係者と対話する機会が増えたことは、筆者にとって嬉しい変化である。「図書館が学校教育で果たす役割が大きいことを改めて感じた」という意見が多く聞かれる一方、進学校では、現行の入試対策が生徒にも教師にも何より重要で、図書館を活用した学びの機会を作るのは難しいという。さらに「小中学校の取り組みで調べ学習が浸透しても、高校が入試対策に追われている限り、幅広い学びの態度は失われてしまうのではないか」という声も聞かれた。

『最終報告』は、「先行き不透明な社会で生きる人々に不可欠な資質・能力を育成する場である高等学校や大学は、我が国社会の基盤を形成するための公共財」であり、「置かれた境遇を問わず、全ての人々が充実した教育を通じて高い資質・能力を身に付け、それぞれの選ぶ道で輝き活躍できる社会の実現」のために、「関係者はもちろん広く社会全体で知恵を出し合いながら取り組む必要がある」と結ばれている。

ここで図書館が立ち上がらない理由があるだろうか。個々の図書館がその役割を果たすとともに、館種を超えたネットワークの中で、人々のライフサイクルに沿った学びの場を創出することが求められているように思う（図）。大学入試を学びの「断絶」ではなく「接続」に変えようとする本学の取り組みが、その検討の一助になれば幸いである。



### 参考文献

- 1) 高大接続システム改革会議『最終報告』2016年3月。http://www.mext.go.jp/b\_menu/shingi/chousa/shougai/033/toushin/1369233.htm
- 2) 中央教育審議会『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（答申）』2014年12月。http://www.mext.go.jp/b\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1354191.htm
- 3) お茶大発新型AO入試（新フンボルト入試）について 2016年1月。http://www.ocha.ac.jp/news/h280126.html  
(もり いつみ：お茶の水女子大学附属図書館)  
[NDC10：017.7 BSH：1. 大学図書館 2. 入学試験（大学）]